

イレギュラー

主義

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはイレギュラーな存在と吸血鬼最強の物語

目次

始まり	1
ジュラテンペスト	5

始まり

ボクという生物は特殊で魔物とも呼べず、人間とも呼べない。所謂、中途半端な存在なのだ。とてもイレギュラーな存在であり、この世界に今までボク以外にこんな存在はいない。見た目は人間と大差はない。

ここはある国

この国はとても豊かで町を歩いている者は皆、笑顔で溢れている。逆に奇妙と言ってしまうほどに笑顔で溢れている。

そしてボクの隣には銀髪の少女がいる。道を歩いている人も彼女に目がいつてしまう、それほどまでの美貌なのだ。

1

「それにしてもお主も物好きじゃのう」

「まあね」

「まあ、お主が好きだったらそれで良いんだがな」

ボクの隣を普通に歩いている銀髪の少女は世間で言う吸血鬼。今日は晴天と言っても差し支えない日だ。吸血鬼が晴天の下で生きていくことはほぼ不可能。

なのにこの隣の銀髪の吸血鬼は何で普通に晴天の下を歩いている

のかと言うとそれは簡単で：彼女が魔王と呼ばれるほどの実力を保持しているから。そこら辺は詳しいことは分からない。だけど一つ確かなのはこの吸血鬼は：吸血鬼なのに太陽を克服した。

その吸血鬼の名はルミナス・バレンタイン。

「ルミさんは人間のことをどう思いますか？」

吸血鬼の目線から見ると人間というのは：一体どんな存在なのだろうか。血という名の魂を得るためには人間の存在は無くしてならぬはずだからね。

「嫌いでもないし、好きでもないのう。少し前までは妾も人間の血を吸っていたが今はお主が居るからのう。お主の血は今まで吸ってきた血の中で一番美味しいからのう。もう一生妾はお主の血を吸って生きていくじやろうな」

冗談だろうと思いつつ隣を見るとルミさんの目は本気だった。

「そんなに吸われたらボクもさすがに死んでしまいますよ。それとボクは人間のことを好きなんですよ」

「それはお主に付いてきたから良く分かっておる。けどお主が何でそこまで人間が好きなんじゃ？」

ルミさんからすれば疑問でならないのだろう。

「それは色々なことがあったんですよ」

「そう言えば、他の魔王たちも随分と活発的に動いているみたいじゃが妾^{わらわ}たちはどうするんじや？」

「何でボクに聞くんですか？ボクは魔王でもありませんから関係ないと思うのですが」

魔王がどう動こうとボクにとって大きな変化はない。魔王という存在は隣にいるルミさんも含めてかなり強力な力を保持している。それこそ人間がいくら束になったとしても勝てないほどに。

3

「何を言っておる。お主は妾^{わらわ}の『主』なのだからお主の意見を聞くのは当たり前じゃろう」

この人はいつになったら『主』というのを辞めてくれるのだろうか。魔王であるルミさんに魔王と呼ばれている何て恐れ多い。

「何を言っていると言いたいののはこっちですよ。ボクはルミさんの主になった覚えはありませんよ。それに年的にもあなたの方が年上ですよね」

「年など関係ない。少なくとも妾はお主を主として見ておる」

「そう言われても……」

「魔王たちの動向にも目を光らせて置かないと何を仕出かすか分かったもんじゃないからのう。妾とお主がいる以上簡単に妾らを倒す事は出来ないと思うがな……あ……そう言えば、最近ジユラの大森林に魔物たちが集まる村のようなものがあるそうじゃ」

ジユラの大森林の近くにはヴェルドラが居たはずなだけど。村を作っているのか人間なのか魔物なのか、どちらなのか分からない以上は何とも言えないけど……もし、魔物が町を作っているんだとしたらそれは確実にリーダーと呼べる者が存在するはずだ。それに今までヴェルドラの存在がジユラの大森林を守っていたとしてもいい。

「そうなのか……時間が出来たら偵察がてら行ってみるとしますかね」

少し興味もあるしね。

「そうじゃな」

ジユラテンペスト

「これは……何とかいうか、凄いな」

僕は目の前の光景を見て、正直に思った感想を口にした。ここはジユラの大森林の近くの土地。ボクの記憶が正しいのであればここは一年近く前まではゴブリンが住んでいたと記憶しているんだけどな。

「そうじゃな。ここまで多くの魔物を統括しているとかなりの力を保有している者が奴らの上に存在しているのじゃろうな」

確かにルミさんの言う通りだ。魔物は別に知性がない訳ではないがここまで統一性はない。それに種族も見ると、バラバラだ。ここまで多様な種族をまとめ上げられる者が存在するとは。

「それじゃあ、中に入ってみましょうか」

「そうじゃな」

ボクとルミさんはなるべく警戒を解かないように中に入っていくことにした。もし、自分たちも強い強力な敵がこの主人の可能性もありますからね。急に襲い掛かれた時のための対処法として。

中に入ってみて改めて感じたけど……この町はそこら辺の国と比べてたとしても引けを取らないほどに技術の発展もしていれば食材の味も美味しい。各故、ボクとルミさんも屋台で売っていた『わたがし』と呼ばれているものを買って食べている。見た目は空に浮かんでいる雲のような感じで味はとても甘い。そしてそれがとても美味しい！

ボクの隣で同じ物を食しているルミさんも同じことを思っているようで今まで見たこともないほど満面の笑みを浮かべながら『わたがし』を食べている。こういう一面を見るとルミさんも普通の女のひと

あんまり変わらないんだなと思ってしまふ。長い年月の間を生きていると…生きていくことへの執着というのが薄れていってしまう。それは生きていくことへの飽きというものが来てしまうから。

だからこういう自分がまだ知らないものを知る事が出来ると生きていくことへの希望というのが少しだけでも湧き出て来るもの。

それはルミさんだけではなくボクにも言えることなだけだね。

「美味しいね。ルミさん」

「うんーこんな美味しいものを食べるのは初めてだのう！」

とても喜んでくれていようボクもここに来てよかった。まだここに来たばかりだけど、これだけでもここに来た価値があったかな。

「それなら良かったですよ。もう一つぐらい買いますか？」

ボクの間いかけを聞くとルミさんはまた一段階上の笑顔を浮かべた。最初は勿論、美味しそうに食べていたけど終わりが見えてくると明らかにルミさんの食べる速度が遅くなっていた。

「…うん」

「それなら買いに行きましょうか！」

ルミさんのこんな笑顔を見る事が出来たのだから今日は本当に良い日だね。